資 料

子どもにおける時間軸上の自己意識の発達

——段階区分の検討——

塚 野 州 一*

DEVELOPMENT OF CHILDREN'S SELF-CONSCIOUSNESS IN TERMS OF AGE

——An approach to setting the stages of developmental process——

Shuichi TSUKANO

The present study was to investigate children's self-evaluation of their past, present, and future, and to set the stages of developmental process based upon the results. The method employed was to ask children to give their preference or rejection of "younger age", "actual age", and "older age" with its reasons. The analysis of the data led us to set the following three stages of the developmental process in children. The first stage, in which children chose their actual age as the best for the main reasons that they had become aware of their development in various abilities together with a greater amount of experience. In the second stage, they chose their actual age as best, but not so positively as in the first stage, because they were enjoying their actual life. In the third stage, they viewed their actual age in the negative, the largest number choosing the older age as the best while the second largest choosing the younger age.

Key words: self-evaluation, stage, actual age, older age, younger age.

問 題

子どもは、過去、現在、未来のそれぞれの時期における自己をどのようにみているのであろうか、またそれにはどんな理由があるのであろうか。そこには自己を意味づけ、評価する、いわば自己を価値づけている様態が投影されており、それについての検討は、自己意識研究の一領域として位置づけられよう。

Zazzo (1969) は、子どもにおける自己の価値づけの発達過程を「発達の力動過程検査」によって明らかにしようと試みた。彼によれば「発達の力動過程検査」の技法は、本質的には、子どもに彼らの発達について問うことによって自己価値の発生を研究すること、子どもが発達について持っている意識の程度を研究すること、子ど

もが発達の中に多かれ少なかれはっきりと区別している諸様相を研究すること、子どもが発達を価値づけているやり方を研究することにある、という。具体的には、「赤ん坊」「おとな」「自分のいまの年齢」の3つの時期について、選択か、拒否か、を問い、それらの理由づけをさせる方法である。

Zazzo は 6, 8, 10, 12歳の少年たちを対象とした面接調査から、当初「おとな」の選択が最も多いが年齢の上昇にともなって「自分のいまの年齢」の選択がそれに替り、「赤ん坊」の選択はどの年齢においてもごく少ない、という結果を得た。さらに選択理由などの検討も合わせ、子どもの自己への価値づけは、次の三段階をへて発達するという仮説を示した。

第一段階：ほとんど下の年齢との比較だけで自己を価値づけている。自己の価値は成長の価値にもとづいている。おとなの選択が多く、下の年齢の選択は少ない。

* 富山大学 (Department of Educational Psychology, Toyama University)

第二段階：上の年齢との比較で自己を価値づける。自己の価値づけはいまについての価値づけとなる。自分の年齢が強調される。おとなの魅力は減少する。

第三段階：下の年齢と上の年齢とを同時に比較して価値づける。現実の自己はパーソナリティの新しい次元によって過去から引きだされるが、それは未来へも通じている。自分の年齢の選択が多くなる。〔精神的特性〕、〔自由、自律〕に対する確信によって子どもは過去の自分とは質的に違っていると判断する。

ところで、我国においてもこの Zazzo の方法にならった、子どもの自己意識の研究が行われてきた。塚野(1976; 1977; 1978)、都築(1980; 1981; 1982)、塚野・友井(1982)、塚野・平野(1985)等である。これらの研究から我国の独自の状況を反映したとみられる結果が見出されている。けれどもそれらの諸研究はほとんど3つの時期の選択数と選択理由の分析にとどまっており、自己の価値づけについての発達の三段階についての検討はされてこなかった。

本研究では我国の「発達の力動過程検査」にもとづく先行研究の結果を踏まえつつ、時間軸における子どもの自己意識の発達過程を分析、検討した。従来の先行研究にみられたような選択数と選択理由の検討に かわえ、Zazzo の自己意識の発達の三段階過程の考察を目的とした。そのために従来の研究方法を次の点で改めた。

1) 過去、現在、将来という時間軸が赤ん坊、自分の今の年齢、おとなで表わされていたが、それらを「下の年齢」、「今の自分の年齢」、「上の年齢」で表わした。過去は赤ん坊、将来はおとなの一時期ではあるが時期全体を表現しきれないということからである。

2) 選択、拒否の理由は自由記述法による質問から選択法によるそれへと変えた。これによって理由の検討をより客観的で妥当性のあるものにしようとした。

方 法

1. 調査項目

- 1) 「今の自分の年齢」と「下の年齢」比べてどちらが いいか。
- 2) 「今の自分の年齢」と「上の年齢」と比べてどちらが いいか。
- 3) 「今の自分の年齢」が いいか。
- 4) 一番なりたい年齢、一番なりたくない年齢はどれか。

についての回答とその理由を質問紙による選択技法で尋ねた。

2. 調査対象

富山市T小学校児童 226 名。

4 年生 (男37名, 女35名) 5 年生 (男35, 女42)

6 年生 (男39, 女38)

富山市T中学校生徒 240 名

1 年生 (男42名, 女37名) 2 年生 (男49, 女44)

3 年生 (男36, 女37)

3. 調査の時期

1684年7月, 9月。

結果と考察

1. 回答数の分析

1) 時期の選択

TABLE 1 の 1, 2 から、「今の自分の年齢」の選択率は、小学生で高いが、中学生では否定率が高くなり、それと対比された「上の年齢」と「下の年齢」の選択率は共に、小学生で低く、中学生で高くなっていった。さらに、TABLE 1 の 3 から、「今の自分の年齢」の肯定率は小学4 年を最高に次第に低下し、中学3 年で最低となった。否定率は、小学生で低く、中学生で高く、中学3 年では60%をこえた。

小学生は現在の選択が主で過去や将来は副次的な選択であるのに対して、中学生は過去や将来の選択が優勢で現在の選択が副次的であり、中学3 年では現在には否定的といえるほどであった。

以上の時期の選択率の検討から、小学生と中学生の二段階、小学4 年と小学5 年以上の二段階、小学生と中学1 年、2 年と中学3 年の三段階設定の可能性が示された。

5) 一番なりたい時期

一番なりたいの選択が10%以上ある学年を含む時期をTABLE 2 でみる。小学5 年までは年下の選択があるが、小学6 年以上では年上の選択にほぼ限定され、小学5 年を境になりたいとする時期が年下から年上に代る過程が

TABLE 1 時期の選択率 (%)

学 年 (人数)	小4 (72)	小5 (77)	小6 (77)	中1 (79)	中2 (93)	中3 (73)
1						
「今の自分の年齢」	55.6	68.8	55.8	39.2	52.3	32.9
「下の年齢」	27.8	19.5	20.8	40.5	19.3	38.4
2						
「今の自分の年齢」	62.5	62.3	55.8	34.2	44.3	20.6
「上の年齢」	29.2	24.7	26.0	43.0	33.0	57.5
3						
「今の自分の年齢」の肯定	66.7	59.7	53.3	29.1	33.0	8.2
「今の自分の年齢」の否定	22.2	19.5	15.6	39.2	25.0	63.0

TABLE 2 一番なりたい時期と一番なりたくない時期
(10%以上の選択率があった学年を含む時期)
上欄の数字はなりたい時期、下欄の数字はなりたくない時期の選択率。

学年 時期	小4	小5	小6	中1	中2	中3
赤ん坊	13.9 18.1	2.6 13.0	3.9 15.6	8.9 10.1	5.7 12.5	1.4 20.6
幼稚園	19.4	16.9	6.5	6.3	4.6	1.4
小1, 2	6.9	13.0	6.5	2.5	6.8	4.1
小5, 6	16.7	19.5	20.8	19.0	8.0	1.4
中3	5.6	29.9	37.7	26.6	36.4	43.8
高校生	9.7 11.1	10.4 6.5	18.2 7.8	16.5 6.3	30.7 4.6	30.1 1.4
大学生	1.4 13.9	2.6 11.7	10.4 5.2	13.9 7.6	12.5 3.4	27.4 1.4
おとな	9.7 37.5	10.4 22.1	13.0 16.9	10.1 29.1	8.0 33.0	17.8 23.3

TABLE 3 の(1)「今の自分の年齢」を選択した理由
小学4年から小学6年まで(%)

「下の年齢」と比較して		
小4 (n=40)	小5 (n=53)	小6 (n=43)
友達がいる (67.5)	友達がいる (62.3)	友達がいる (76.7)
体力がある (27.5)	体力がある (41.5)	いろいろな経験ができる (44.2)
遊べる (22.5)	いろいろな経験ができる (30.2)	やりたいことをする能力がある (41.9)
やりたいことをする能力がある (22.5)	身体が大きい (20.8)	体力がある (25.6)
身体が大きい (20.0)		好きな先生がいる (20.9)
「上の年齢」と比較して		
小4 (n=45)	小5 (n=48)	小6 (n=43)
遊べる (48.9)	友達がいる (27.1)	友達がいる (39.5)
暇がある (24.4)	遊べる (27.1)	いろいろな経験ができる (27.9)
友達がいる (22.2)		自由がある (23.3)
生きられる時間が長い (22.2)		なんとなく (23.3)
自由がある (20.0)		他の理由 (20.9)
比較なしで		
小4 (n=48)	小5 (n=46)	小6 (n=41)
友達がいる (35.4)	友達がいる (41.3)	友達がいる (73.1)
やりたいことをする能力がある (25.0)	遊べる (23.9)	いろいろな経験ができる (46.3)
自由がある (20.8)	学級の雰囲気がよい (21.7)	遊べる (41.5)
かわいがられる (9)	やりたいことをする能力がある (21.7)	やりたいことをする能力がある (31.7)
	いろいろな経験ができる (21.7)	自由がある (29.3)
	なんとなく (21.7)	学級の雰囲気がよい (26.8)

みられた。また中学生はどの学年でも低い選択率となっていた。この結果からは、中学生は年上の時期を志向していることがみられ、現在に否定的で将来や過去の選択が優勢であるという、時期の選択率の結果を裏付けた。

3) 一番なりたくない時期

赤ん坊とおとなが、全部の学年で一番なりたくないの選択が10%以上であり、さらに小学4年を除くと、中学3年もこれに含まれた。特に、おとなは、なりたい時期でも10%以上の選択率を示す学年が多く、アンビバレンツな時期といえる。これにたいして中学3年はなりたくない時期のみで比率が高くなっていた。

一番なりたい、一番なりたくない時期の選択結果からは、なりたい時期では年上の選択率が低いこと、なりたくない時期では中学3年の選択率が低いこと、から小学4年と小学5年以上の二段階の区分ができよう。

2. 理由の分析

1) 「今の自分の年齢」を選択した理由

「下の年齢」との対比で「今の自分の年齢」を選択する理由は、友達存在、成長の自覚、多様な経験が多いということにまとめることができよう。先行の研究結果でも指摘されていたように、児童・生徒にとって友達の存在が大きな支持的な意味をもつことがこの結果からも示されている。

「上の年齢」との比較では、「今の自分の年齢」は、ゆとりがあり、束縛がないとみていることがうかがわれた。

友達がいるは、小学生と中学1年だけで多い理由であり、中学2、3年では多い理由ではなく、小学生、中学1年と中学2、3年の間に差異が認められた。

特に比較する年齢を設けず、「今の自分の年齢」を肯定するか否定するかについては、友達がいる、がどの年齢でも多い選択理由としてあげられた。これも友達が児童・生徒の生活の大きな存在理由であることを示すものといえる。

2) 「下の年齢」、「上の年齢」の選択理由

「下の年齢」の高い選択率の理由は、全部の学年に共通のものとして、遊べる、があり、5つの学年で高い選択率の理由は、自由がある、勉強

TABLE 3 の (2) 「今の自分の年齢」を選択した理由
中学1年から中学3年まで (%)

「下の年齢」と比較して		
中1 (n=31)	中2 (n=46)	中3 (n=24)
いろいろな経験ができる (54.8)	友達がいる (56.5)	いろいろな経験ができる (45.3)
友達がいる (45.2)	いろいろな経験ができる (47.8)	友達がいる (37.5)
やりたいことをする能力がある (41.9)	同左 (39.1)	なんとなく (37.5)
お金がある (29.0)	なんとなく (37.0)	やりたいことをする能力がある (37.5)
自由がある (25.8)	体力がある (32.6)	体力がある (25.0)
身体が大きい (22.6)	自由がある (26.1)	学級の雰囲気がい (20.8)
「上の年齢」と比較して		
中1 (n=27)	中2 (n=39)	中3 (n=15)
自由がある (48.1)	なんとなく (33.3)	いろいろな経験ができる (40.0)
お金がある (37.0)	遊べる (23.1)	学級の雰囲気がい (26.7)
なんとなく (33.3)	自由がある (23.1)	遊べる (26.7)
自立できる (29.6)	ひまがある (20.5)	同左 (20.0)
遊べる (25.9)		
ひまがある (25.9)		
やりたいことをする能力がある (25.9)		
いろいろな経験ができる (25.9)		
友達がいる (22.2)		
比較なしで		
中1 (n=23)	中2 (n=29)	中3 (n=6)
いろいろな経験ができる (47.8)	友達がいる (65.5)	なんとなく (66.7)
友達がいる (34.8)	いろいろな経験ができる (34.5)	友達がいる (33.3)
なんとなく (30.4)	なんとなく (27.6)	好きな先生がい (33.3)
学級の雰囲気がい (26.1)	遊べる (24.1)	学級の雰囲気がい (33.3)
自由がある (26.1)		
ひまがある (21.7)		

がない、ひまがある、であり、「下の年齢」をほかの時期より、ゆとりのある、自由な時間がすごせるものとしていた。

「上の年齢」でどの学年でも高い選択率の理由は、やりたいことをする能力がある、いろいろな経験ができる、であり、小学4年を除く小学5年以上で高い選択率の理由は、お金がある、自由がある、自立できる、であった。

「下の年齢」、からは段階区分は明確にはならないが、「上の年齢」の選択理由からは小学4年と小学5年以上に区画できる。

3) 「今の自分の年齢」の拒否理由

自由がないが小学5、6年、中学1、3年の4学年で高い率の拒否理由であった。中学1年では、学級の雰囲気が悪い、中学2、3年では勉強があるなどの学校に関係したことが拒否理由で高い率を示した。小学5年でも勉強がある、小学6年では好きな先生がいなどの学校に係わる理由が高い率を示していた。勉強、先生、学級の雰囲気などの学校生活に関すること、おそらくはそれらとの関係で意識すると思われる自由がないことが

「今の自分の年齢」の拒否理由の典型であり、それは、小学5年以上の学年でみられていた。

「上の年齢」の選択理由と「今の自分の年齢」の拒否理由からは、小学4年と小学5年以上の二段階が提案された。

討 論

1、段階の区分について

これまでの検討から、時期の選択率などの量的な推移からは発達段階の枠組みが示唆されたが、選択理由などの質的な変化からは段階内容の提案がなされたとみることができよう。それを組み合わせるとつぎの三段階の設定が提起される。

第一段階；「今の自分の年齢」を積極的にはっきりと肯定する。その理由は友達存在、精神的身体的能力の成長や経験の増大の自覚などである。自分の今の生活を享受している。赤ん坊、幼稚園の時期などもなりたいたするが、おとななどの上の年齢はなりたくないが多い。

第二段階；「今の自分の年齢」の

肯定が依然として優勢である。友達存在がさらに重要性を増す。精神的身体的能力の成長の自覚、に加え、ひまがある、遊べる、自由がある、などの生活のゆとりを強調する。「下の年齢」は自由があり、ひまで遊べるので肯定され、「上の年齢」は自立できる、いろいろな経験ができるなどの理由で肯定される。また、勉強がある、自由がなく、ひまがなく、遊べないが「今の自分の年齢」の拒否理由となる。

第三段階；「今の自分の年齢」よりは、「下の年齢」、「上の年齢」を望む。上と下の年齢の選択理由は、遊べる、ひまがある、自由がある、などである。勉強がないことは「下の年齢」の選択理由として多くあげられている。「今の自分の年齢」の拒否理由として、勉強がある、ひまや自由がなく、遊べない、お金がないことなどが多くあげられている。「今の自分の年齢」の否定率は高い。なりたくない時期として赤ん坊、中学3年、おとなが高い率を占める。なりたくない時期として、高校生、大学生などの「上の年齢」をかなりはっきりと志向する。

時間軸上の自己の評価のされかたは、小学校中学年か

ら中学生までの、児童期から青年期にかけて、現在の自己を肯定することから否定することへの変化であり、退行あるいは逃避傾向として過去や未来の自己の選択が強まるとみることができ、その過程は三段階に区分できるのではないのだろうか。

これは、未来における自己への志向が、未来を展望した現在の自己の肯定に変化するという、Zazzo の発達過程と異なっているといえる。現実の自己を見つめながらもいまを肯定し、自律の確信によって「今の自分の年齢」を選択しつつ、やがて来るおとなの時期を受け入れ、その準備をし始める段階は本研究では見出すことができなかった。しかし、Zazzo の研究対象は12歳までであり、このあとの年齢についての検討はされていない。Zazzo の場合も13歳以降の様相が、本研究の第三段階と対応する可能性も残されている。

ただ、与えられた結果からみると、Zazzo の提言した自己意識の発達過程では、将来を展望しながら積極的意欲的に生活している児童青年像がイメージされる。それに対して、本研究で結論づけられた三段階は、年齢の上昇と共に自分の今の生活を否定し、過去や未来への退行あるいは逃避を願う青少年像がイメージされた。

こうした傾向はどこに説明を求めるべきなのであろうか。先行の諸研究がすでに論じたように、我国の社会的教育的状況である、中学3年をピークにした進学、受験など（本研究の対象者の範囲では）による児童・生徒への重圧によることが、考えられる。とくに、中学3年を一番なりたくないとする率が、小学5年から30%近くあり、中学3年では40%をこえる結果は、この説明を支持してくれよう。

松田（1983）は、本研究の被験者の該当年齢における自己意識の諸特徴として、客観的評価能力の成長によって生じてくる、自己に対する否定的な見方がめだつ（児童期の第三段階）、あるいは、自己自身の問題として明確な価値観や将来の展望を形成するにはいたらない（青年期の第一段階）などをあげている。こうした抽象化された発達の諸特徴は、具体的にはその考察の対象とされた児童青年の実際の環境とそれを反映した意識をその内実とするものであり、本研究の結果も、こうした自己意識の抽象化された諸特徴の一部を、我国における実情のなかで具体的に例証したことになるといえるのではないか。

2. 方法上の問題について

Zazzo は自己の価値づけについての三段階仮説を、「今の自分の年齢」、「赤ん坊」、「おとな」の3つの時期を使った質問によるデータから、設定した。しかしそれぞれは、現在、過去、未来の象徴であり、実際のデータ

は赤ん坊やおとなについてのものでありながら、それは「下の年齢」、「上の年齢」として考察され、過去や未来として抽象され、仮説として統合されている。けれども赤ん坊と過去、おとなと未来とではそれぞれの用語に内包される範囲に開きが有りすぎる。事実、筆者の経験でも、「赤ん坊」の時期はいやだが、「幼稚園」の時期はいいという、等の例がみられた。

本研究では、赤ん坊、おとな、の代りに、「下の年齢」、「上の年齢」を使用した。その点では、方法として使われた用語と考察でのそれとの間の差は縮小され、データと考察の間の矛盾やズレが押えられたと考える。

しかし、「下の年齢」、「上の年齢」という内包する範囲の広い用語の使用は、被験者が回答の際に想起する時期によって（例えば、「上の年齢」に中学3年を考えるか、おとなとするか）、回答の内容が異なってしまうという、克服すべき課題を新たに生じさせた。

引用文献

- 松田 惺 1983 自己意識 波多野完治 依田新編「児童心理学ハンドブック」金子書房、640-664。
 塚野 州一 1976 子どもは年齢をどう価値づけしているか 日本教育心理学会第18回総会発表論文集、326-327。
 塚野 州一 1977 子どもは年齢をどう価値づけしているか（その2） 日本教育心理学会第19回総会発表論文集、216-217。
 塚野 州一 1978 子どもは年齢をどう価値づけしているか 富山大学教育学部紀要、(A 文科系) 26, 135-142。
 塚野 州一・友井はるみ 1982 子どもの自己意識の分析 心理科学、5, (2), 1-13。
 塚野 州一・平野祥智子 1985 子どもの自己意識の発達 富山大学教育学部紀要、(A 文科系) 33, 69-80。
 都築 学 1980 児童における自己の成長・発達のイメージ 日本教育心理学会第22回総会発表論文集、500-501。
 都築 学 1981a 幼児の自己意識の発達 教育心理学研究、29, 70-74。
 都築 学 1981b 発達の力動過程検査を用いた自己意識の分析 教育心理学研究、29, 245-251。
 ザゾ. B. (久保田正人・塚野州一訳) 1974 発展の力動過程 ザゾ. R. (編) 学童の生長と発達 明治図書 210-252。
 (Zazzo, R. 1969 Le dynamisme évolutif chez L'enfant Zazzo, R. (Ed) Des garçons de 6 à 12 ans Paris; P.U.F. 221-263.)

(1986年12月25日受稿)